

公園内で見られる植物

写真は7月18日(土)
自然観察会で見られた
植物です



ヘクソカズラ (アカネ科)

昔から非常に臭いという事になっていて、それゆえに思いつく限り最悪の名前が付けられた植物である。別名ヤイトバナは中央部分がヤイト(お灸)のあとに似ているからだという。花の筒を覗き込むと内側が多数の毛で覆われていることがわかる。つる性の多年草で茎は左巻で木や草に絡まって伸びる。



タブノキ (クスノキ科)

霊が宿る木とされていたことから、「霊 (たま) の木」と呼ばれ、それがしだいに「たぶのき」に変化した。クスノキに似ているがクスノキのような芳香はない。実は7～8月に黒紫色に熟す。タブノキの樹皮の粉から線香がつけられる。葉を紙すきのネリとして用いる。



モクゲンジ (ムクロジ科)

枝先に、たくさんの黄色い花を咲かせます。花は開いた当初は全体が黄色ですが、一両日の内に中央部のふくらみが赤く色づきます。英名で「Golden rain tree」と呼ばれ、まさに金色の雨が降るようにハラハラと散ります。



ヤエクチナシ (アカネ科)

花は甘い良い香りがするので、庭木や公園樹としてよく栽培されています。果実が熟しても口を開かないことから「口無し」と名付けられた。この八重のクチナシには実が付きません。ヨーロッパでは純白のクチナシはウエディングブーケの材料としておなじみで、恋人に贈る花として大切にされてきました。



ヤブガラシ (ブドウ科)

地下に縦横にのびた根茎で芽を出し、生長が早く四方八方に伸びて他の植物に絡みついて覆いかぶさります。繁殖力は非常に旺盛でたちまち全体を覆い、藪を枯らしてしまうことからこの名が付いた。また、家の周りに生えたヤブガラシが全体を覆うといかにもみすぼらしく見えることから、貧乏カズラの別名もあります。



イソノキ (クロウメモドキ科)

稲を束ねるワラを「ユイソ (結いそ)」と呼び、しなやかな枝を結束に使ったことから、ユが省略されイソノキとなったとか?若い枝は褐色ではじめは毛があります。実はあまり目立ちませんが、のちに赤くなり熟すと紫黒色に変わりよく目立ちます。葉の付き方に特徴があり、左右2枚ずつ交互 (コクサギ型) に付くことがあります。



ハマナス (バラ科)

文献によると江戸時代にナスは丸い形が好まれ、物文字通り「浜辺のナス」で「ハマナス」となったとする説と、夏から秋にかけて赤く熟す果実を食用とし、その形が梨に似ている事と、味が梨に似ていることからハマナシ (浜梨) が訛り「ハマナス」になったという説があります。



リョウブ (リョウブ科)

平安時代以来、飢饉に備え若葉を食料として貯蔵されたとされ、飯や穀物に混ぜて炊き食料不足を補ったらしい。平安時代に思いを馳せ、リョウブ飯を食べてみた。飽食の時代にあって、珍しくはあったが美味しいとは思えなかった。



ハゼノキ (ウルシ科)

和ロウソクの油を実からとるために栽培されていた。ウルシの仲間なので、秋に赤く紅葉する。かぶれることがあるので、注意が必要です。